

2019. 6. 13 (木)

学びと成長

今井 信雄

真似をする

きょうの私に与えられたテーマは「大学の学び」ということなので、それについて私がお話できることとお話したいと思います。

「学ぶ」という日本語があるのでそれがテーマになっているのですが、もうご存じかもしれませんが、学ぶというのは語源的には「真似ぶ」というところからきています。「真似ぶ」というのは真似をするということで、学ぶということの基本が真似をするということになっています。真似をするというのは何らかのやり方を教えてもらうということで、その先生のやり方の真似をするということなのです。スポーツでも何でも真似をして教えてもらいながら学んでいくということが基本になっています。

スポーツなどではそのやり方を真似するというのはわかりやすいのですが、勉強や学問も実は一緒に、先行研究をあたってくださいとゼミなどと言われると思うのですが、それは前にやった人の研究のやり方を真似してくださいということなのです。真似をしながら一つ一つ自分のものにしていくということなのですが、実は、これは勉強やスポーツだけではなくていろいろな人間関係でそこでの生活の仕方や人に対するの関わり方も学ぶとい

うことを言います。その場合はその人間関係の中でどういうふうに住生活していけばいいのか、配慮していったらいいのかということを実践するということになるのです。

その場合は、どこかの人間関係の中に身を置いたり集団の中で生活していくということなのですが、そのときに大事なものは、その人間関係の中に自分が入って行って、一つ一つ真似をしていくというのが学ぶということになります。

ここで、少し疑問がわくのですが、真似をしているだけで自分はいいのかと、教えてもらって学んで真似をするということは、ここに目標があるのです。その人と同じようにして自分のものにしていった後にどうするのかということなのです。つまり真似をするということは、目標は見えていて、そこから先は真似をするだけだとそこから先は見えてこないということになります。

社会圏の交差

では、そのときにどういうふうにかんがえたらいいのか。これは、私は社会学が専門なので、きょうは社会学のところから少し紹介したいと思います。ジンメルという社会学者がいて、人間の個性はどこから生まれて

くるのかという話をしています。その人が生活する社会の網の目のような人間関係の集まりのようなものを社会圏と言っていて、その中で学んでいくわけなのですが、その人はその人らしさ、どういうふうにつくり上げられていくのかというときに、ジンメルは社会圏の交差だと言っています。つまりいろいろなところで学んだことがあって、こっちの社会圏で学んだこと、こっちで学んだことが重なったときにその人らしさが生まれるのだということが言えると思うのです。

そういうことを考えると、大学という場にはいろいろな社会圏があって、ゼミももちろんありますしサークル、授業、それ以外の人間関係もあります。大学という時間は大学以外でのいろいろなところで過ごす場所があり得る人生の時間です。ということは、さまざまな社会圏の中で皆さんは人生の時間を過ごすことができるという貴重な大学生時代だと言えます。いろいろな社会圏で学んで、それを交差させていくということが皆さんの中で大きな学びになるのではないかと思います。

自我の創発

ジンメルのお話をしましたが、もう1人紹介して、学ぶところからそれより先に行くためにはどうするのかということでお話すると、ミードという人がいます。ミードは自我論、自分はどういうふうに生まれるのかということを研究していた人ですが、小さい赤ん坊のときから自己を学んでいって人間らしくなるという話をすると、役割というのを期待したり受け取りながらその人らしさが出てくると言っています。母親や父親は子ども

に子どもらしさを期待して、子どもは母親に母親らしさを期待するというので自分というものができてくるというのですが、一般的には日本の社会学ではそういう役割期待の話としてミードの自己はどうあるべきかということで紹介されることが多いのですが、ミードの面白さはもう1つありまして、「創発」、創られて出てくるというようなイメージなのですが、自我は創発するというのです。日本の社会学の中では役割期待の中であなたは女だから女らしさ、それに対して自分は反発するか受け入れるかによって自分が出てくるとミードの理論が紹介されるのですが、もう1つ全然違うところから言っているのが創発という概念で、その人の、あるいはその主体の内部に原因がないのにいきなりそれが生まれるということなのです。

例えば草があって、その草が餌であるという意味を与えられるときには草が自分から餌にしてくださいと言ってなるわけではなくて、草食動物が出てこないとその草は餌の意味が生まれないのです。ということは草の中に餌という意味を与えられる要因はないのです。草食動物という外側にあるそれを取り巻く中の状況が変化しないと、いきなり草が餌であるという意味が創発しないのです。その草の内部に原因がないのに、いきなりそれが創られるというのが創発ということです。

ミードも自我はそういうふうには言っていて、いきなり自我が生まれる。ただし、その自我が生まれるためにはそういう状況がないといけなのですけれども、なぜそれが生まれるかというのは、その内部に原因はないということを行っています。

これは個人的なことであり一般的なことでもありますが、例えば赤ちゃんがいきなり

言葉を発するということがあります。何で言葉を覚えるかといういきなり覚えるのです。これをやっていたら次にこれを覚えるというのではなく、これは皆さんも周りです。この経験はよく聞くとと思うのですが、いきなり言葉を発するのです。それは積み重ねというよりも何かやっているときにいきなり創発すると言えると思うのです。

自分らしさ

先ほどの社会圏の交差ということは一つあるのですが、もう一つは、皆さんがいるところ学んだことは、目標があってそこに到達するまでのことなのですが、それをどうやって超えるか、自分らしいものをつくり上げていくのかというときに、それは恐らくいつそうなるかわからない、いつ新しいものが生まれるかわからない、それは学び始めたときや学んでいる途中には学ぶことの目標はもちろんあります、シラバスを見たら到達目標などがいろいろ書いてありますし、スポーツならスポーツのこれができるようになるなどがあると思いますが、それを超えて何か自分が学んだと実感が持てて成長できるというのは、いつそれが自分の中に創発するかというのはよくわからないのです。ですから、私が言いたいのは、目標があってそれに向かって努力するというのはいちいち真似をしていくということの学びであって、それは

確かに大事なのですが、皆さんの人生の中で、もう一つ大事なのはいきなり何か自分の成長に結びつくことができ得るということで、皆さんは振り返ると実はそれはもう大学に入学する前に実感していると思うのです。中学や高校で勉強したりいろいろなことをして学んできたと思うのですが、それをやっている過程で学んだこと以上のことを実は学んできたのではないかと思えることがいくつかあると思うのです。それはやっているときにはわからないのですが、終わった後に人生の経験を踏んでいって、いきなり新しいものが生まれるということはありません。そういうふうにして世の中の社会や人々が生活して生きていくというところがあるので、ただ、皆さんとしては私もですが、日々の学びを地道に学んでいくということが、いきなり何か新しいものが生まれるということに結びつくことがありますので、そういうことを社会学も研究していますし、そこから私が学んだことも学びですけどもありますので、皆さん大学生生活これからまだずっと続く人もいますし、もう少しで終わる人もいますけれども、目の前にあることを一つ一つ積み重ねて新しい学びに結びつけていていただければと思います。

私の話は以上です。これで終了したいと思います。どうもありがとうございました。

(社会学部教授)